
白雪姫の親

アマノン ジャック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白雪姫の親

【Nコード】

N5707M

【作者名】

アマノン ジャック

【あらすじ】

昔々、在る所にちよつとぽつちやりした少女と7人の小さな人間が住んでました。

（前書き）

主人公は義母である魔女です。

「おい、チビ共！菓子持って来い。」

「は、はい！只今！！」

白雪の命令で急いでお菓子を持ってくる小人達。

「まあ…何て可哀想なの。」

魔女が鏡を通して様子を見てた。

「あんな、小さな子達に…信じられない。」

鏡越しで今にも泣き出しそうになる魔女。白雪の自分勝手さに嘆く。

「あの娘の義母として、何とかしなくては…このままでは結婚出来ないわ。」

魔女は溜め息を吐いた。血が繋がっていないとはいえ、魔女にとって白雪は大事な娘。

「初めて会った時はあんなに可愛かったのに…」

小さな頃は雪のように白く林檎のように赤い頬が可愛らしかった白雪。だが、今では…

「丸々、太って…ああ、白雪。」

再び嗚咽を漏らし始める魔女。

「一人暮らしをする貴女を思っ て小人達を召還したのに、間違いだ
ったのね…」

それは今年の春の事だった…白雪は急に一人暮らしがしたいと言
い出し魔女の元を去ったのだ。年頃の娘を思っ た魔女は反対したが白雪
は聞きもせず家を出て行っ た。白雪が心配な魔女は7人の小人を召
還し、今に至る。

「ああ…本当にどうしましょう…」

オロオロする魔女。すると…

「お妃様、大丈夫ですか？」

魔女以外に誰も居ない部屋に声が響く。

「ああ、鏡さん。気を使っ て頂いて有難う。」

声は鏡だった。自分の主である魔女が心配だったのか思わず声を掛
けてくれたらしい。

「お妃様も大変ですね。あんなデブに…」

「鏡さん、今すぐ貴方の面を叩き割りましょうか？」

我が子を馬鹿にされ腹を立てる魔女に鏡は慌てて謝る。

「あ！すいません…しかし、白雪嬢も酷いですね…お妃様を困らせ
るなんて。」

「そうね…でも仕方無いわよ。子供っ てのは親を悩ませるんだから。」

「お妃様…。（お人好しというか親バカです…。）」

鏡は主である魔女を更に心配そうに見る。

（私が何とかせねば…そうだ！）

鏡は閃いた。

「そうだ！お妃様。薬を作っではどうですか？」
「え？」

魔女は薬を煎じるのが得意だった。

「薬で…」
「貴方、娘に薬中になれと？」
「いやいや、そうじゃなくて…。」
「太ってるから痩せ薬を作れと？」
「それも違います！」

鏡は魔女の抗議に必死に弁明しつつ意見を述べる。

「あのですね、性格に効くような薬を作っでは如何ですか？」
「まあ！貴方…娘が性格ブスだと言いたいのか？」
「ちよっ…話を最後まで聞いて下さい！（まあ確かに性格もブスだけど…）」

鏡は白雪の悪口を心中にしまいながら続ける。

「えっとですね。性格って直そうと思ってもなかなか直らないじ

やないですか？」

「まあ、そうね。」

「ですから…性格を変えるような薬を…」

「酷いわ！鏡さん、そんなに娘を薬中にしたいの？」

「だから、そうじゃなくて！」

意見を述べたいのに伝わらない。魔女の親バカっぷりに鏡も呆れてしまう。

（でも、此処で言わなくては…私が心を鬼にして。）

鏡は決意を固め再度告げる。

「お妃様、率直に言います。白雪嬢の性格を直さないと嫁げませんよ？」

「うっ！」

泣き出しそうな魔女。しかし鏡は構わず告げる。

「小人達の件もそうですし、今の白雪嬢は自分の事しか考えてない…周りに迷惑を掛けてるのも気にしない最悪な娘です。」

「鏡さん！」

「良いですか？本当に我が子を思ってるなら時には叱るべきです…甘やかしてばかりではいけません。」

「……。」

「確かに薬に頼ると言ったのは詫びます。でも貴女はあの娘の母親なんです！」

鏡は魔女に諭すように言う。

「貴女がしつかりしないで誰が白雪嬢を正すのですか？」

「でも、私あの娘と血が繋がってないのよ……」

「それが何なんですか！あの娘を想うのでしたら……主は立派な親です！……」

「……！！」

魔女の目に涙が零れ落ちる。

「さあ、涙を拭って……お行きなさい……我が主。」

鏡は魔女に白雪に会いに行くように説得する。すると、魔女は立ち上がり部屋を出て行く。

「……。」

出て行く前に振り返り……

「有難う、鏡さん……。」

扉を閉め、魔女の足音は遠ざかっていた。

（やれやれ、頑張って下さいよ？主……）

その夜、白雪の家を訪ねた魔女は初めて娘と喧嘩した。鏡に言われた通りに母親らしく……初めて娘を叱った。白雪も義母の態度に驚いていたが、やがて……

「まさか、貴女が私を叱るなんてね……」

白雪は魔女に向かって言う。

「…本当、驚いちゃった。でも…」

「でも？」

「何でだろ？怒られてるのに嬉しいと思うなんて…ゴメンね。」

泣き始める白雪。

「ゴメンね、お義母さん…心配してくれてるのに我が儘ばかり言うて。」

「白雪…。」

魔女は白雪を抱き締め、一緒に泣いた。

こうして、親子のぎこちない縁は修復され白雪も立派な姫になりましたとさ。

めでたしめでたし。

(後書き)

書いた後、

「うわぁ、何コレ…寒っ！」

いつも通りギャグ展開にするつもりが違う方向へ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5707m/>

白雪姫の親

2010年10月9日01時55分発行